

## 「コロシアウクライナラ」

### フィリピの信徒への手紙 4 章 6～7 節

### ペトロの手紙— 3 章 18 節

人文学部チャプレン 柳田 洋夫

すでにお気づきのことと思いますが、本日のメッセージのタイトルには、今、戦いの中にある二つの国の名前が入っています。これは、最近出された、とある楽曲のタイトルをそのまま拝借したものです。その歌詞の中にはこのような言葉があります。

訳も分からず泣く子供と

赤く染まる街 灰積もる故郷(こきょう)

俺祈ることしか出来ない

知らないフリしてる神様

どうせ叶わないようなやり方 でも

コロシアウクライナラ

(Authority ‘Pray for’)

人々が泣き叫び、街が血で染められる状況の中で、神さまは知らないフリをしている、そして自分は祈ることしかできない。そのような切実な気持ちが歌われています。戦争のことを真正面から取り上げて歌うこと自体なかなか勇気がいることであり、すごいと思います。ただ、キリスト教の立場からあえて言うならば、神さまは、決して知らないフリはしていませんし、また、祈りというのは、ただの気休めに過ぎないような無力なものではありません。そのことも念頭におきつつ、本日与えられている聖書のみ言葉に聞いていきたいと思います。

まず、「フィリピの信徒への手紙」には、「あらゆる人知を超えた神の平和」とあります。ここにこそ、また、ここにのみまことの平和がある、と言わねばなりません。なぜなら、「人間による平和」は、これまで完全な形で達成されたことはなかったし、これからも残念ながら達成されることはないだろうからです。この世の平和というのは、実のところ、大抵は一時的な休戦状態に過ぎません。もしくは、力ある者が弱き者を抑圧することによる偽りの、見せかけの平和でしかありません。そのようなまやかしの平和は、ちょっとしたきっかけでたちまち破綻します。

しかし、誰かが誰かを殺し傷つけ、その報復でまた誰かが殺し傷つけられる、そのような暴力の連鎖を断ち切る方法はないものでしょうか。実はそれはすでに、私たちが思いもかけない仕方によってな

されました。「ペトロの手紙一」のみ言葉には、「キリストも、罪のためにただ一度苦しめられました。正しい方が、正しくない者たちのために苦しめられたのです。あなたがたを神のもとへ導くためです」とあります。ここではキリストの十字架が指し示されています。神さまは、そのひとり子イエス・キリストを、私たちのために犠牲として与えてくださいました。自らが殺されることによって暴力を断ち切る、神の子による完全で、またそれゆえにただ一度きりの犠牲です。そのようにしてイエス・キリストは、私たちの罪や積み重なった暴力や欲望や憎しみがすべてご自身の上而降りかかることを選ばれたのでした。そしてまた、父なる神は、イエス・キリストの犠牲を通して私たちを赦されました。

「神の平和」はまさにここにおいて打ち立てられました。もしも、その平和に私たちがあずかることができるならば、それ以上に喜ばしいことはないでしょう。それは決して不可能なことではありません。み言葉にあるように、キリストの十字架は、私たちを「神のもとへ導くため」のものでもあるからです。しかしまた、それは簡単になされるものではないことも確かです。それでは、「神の平和」にあずかる可能性はどこに見出すことができるでしょうか。

「フィリピの信徒への手紙」のみ言葉にはまた、「何事も思い煩ってはなりません。どんな場合にも、感謝を込めて祈りと願いを献げ、求めているものを神に打ち明けなさい。そうすれば、あらゆる人知を超えた神の平和が、あなたがたの心と考えとをキリスト・イエスにあって守るでしょう」とあります。ここに、私たちが「神の平和」にあずかる可能性がはっきりと示されています。しかし、何事も思い煩うことなく、いつでも感謝を込めて祈りと願いを献げる、というのはなかなか難しいことでしょう。私たちが普段しているのは、だいたいその反対のことだからです。

しかしながら、もし、少しでもこの勧めを実行できたら、どんなにかいいだろう、と憧れる気持ちがみなさんの中に少しはないでしょうか。全くないわけではないと思います。なぜなら、いつも思い煩ってばかりいて、感謝ならぬ、さまざまな恨みつらみにまみれて生きていきたいと思う人はいないはずだからです。そして、あらゆる意味において平和というものは、究極的には、自分自身で実現することは不可能であり、自分を超えた何かによってしか叶えられないことを、私たち自身、うすうす感じているからです。

思い煩いをやめて感謝を込めて祈りと願いを献げることは、キリストの十字架によって自分が赦され、存在を認められていることを知ることから始まります。そのようにして、キリストが私たちのためになされたことが私たちの一部となり、私たちの中で新たな心が生まれ育っていきます。そのことは、祈りとともに聖書のみ言葉に親しむことによって、また、教会の礼拝においてなされます。それは一進一退に見えながらも、確実に前進する歩みです。なぜなら神の力は私たちの罪の力を超えるものだからです。そして、少しずつではあっても、キリストの十字架による神の赦しを私たちが知り、受け入れることができるならば、私たち自身の中にまた、人を赦す心が芽生えてくるはずで、そのようにして、神に赦されていることを知るゆえに、誰かを赦すことができる、そのような心がほんの僅かでも私たちに与えられるならば、「神の平和」はそこで確かに先取りされ、時には思いもかけないかたちで実現すると言えるでしょう。

今、思いもかけないかたちで、と言いました。「神の平和」とは決して単純なものではありません。それは、神の子の苦しみによって成し遂げられたものですから、それを受け入れる者も、何らかの労苦を避けることはできません。特に、困難な状況において、とりわけ弱き人々のために働く人々は、常に悩み苦しみの中に置かれることになるでしょう。しかしそれでも、というか、だからこそ、そこには、神と人とのつながりにおける平和と喜びがあります。ただ一人で平穏に過ごすような見せかけの平和をはるかに超える「神の平和」がそこにはあります。そのことは、「わたしの兄弟であるこの最も小さい者の一人にしたのは、わたしにしてくれたことなのである」(マタイ 25:40)というキリストの言葉によって端的に示されています。そのようにして、限らない労苦と悩み苦しみの中でこそ、神の平和を垣間見てきた人々が多くいます。そして、私たち自身、思いもかけず、そのような神の平和の裾に触れることがあるかもしれません。

というわけで、「ロシアウクライナラ」、みなさんはどうですか。

お祈りをいたします。

主イエス・キリストの父なる神さま、ここに共なる礼拝の時が備えられましたことを感謝いたします。この世界の多くの場所が、痛ましい光景に覆われています。私たちが知らされているのは、そのほんの一部にすぎず、私たちができることはほとんどなきに等しいことを思わずにはいられません。しかし、すでに、イエス・キリストの十字架によってあなたの平和が私たちに与えられていることを信じ、またそれゆえに、あなたの平和を少しでもこの世に映し出していくことができますように。何よりも今、命と生活をおびやかされている人々の上に、あなたの助けがありますように。

主イエス・キリストのみ名によって祈り願います。アーメン

2022年10月6日 聖学院大学 全学シリーズ礼拝「聖書が語る平和」